中学校特別支援学級在籍生徒を対象とした就労支援講座の実践報告
－市の福祉部門と学校との連携によるキャリア発達支援の試み－

○榎本 容子　（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所　主任研究員）
○小田切 めぐみ（南アルプス市役所 こども応援部こども家庭センター　途切れのない支援担当）
石本 直巳　（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）
北村 拓也　（独立行政法人国立特別支援教育総合研究所）
相田 泰宏　（横浜市教育委員会事務局）

１　はじめに

障害のある若者の中には、学校卒業後に進学や就労を果たしながらも、進路先の環境に適応できずに中退や離職に至り、社会的に孤立するケースがある。その背景には、仕事をするうえで重要となる力や、職場のルール等に対する理解（仕事理解）の困難さや、自分の特性や得意なこと・苦手なこと、自分に必要な配慮等に対する理解（自己理解）が十分に育っていないことなどが考えられる。こうした課題に対応するためには、学校段階から将来の社会的・職業的自立を見据え、発達段階に応じて段階的にキャリア発達を支援する取組が求められる。キャリア発達とは、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していく過程」を意味し、仕事理解や自己理解を段階的に深めていくことが重要となる。

このような取組を進めるうえでは、生徒一人ひとりの発達段階や障害特性に応じた多様な学びの機会を用意するとともに、職業体験や地域での体験活動を通じて、仕事に対する具体的なイメージを育むことが重要である。また、仕事をするうえで共通して求められる基本的な力や姿勢は、学校や地域での学びの中でも育むことができるため、これらと関連付けながら気付きを促す視点が求められる。さらに、自分らしく働くために必要な配慮について考える機会を意図的に設定することも重要である。特に中学校段階は、「現実的探索と暫定的選択の時期」とされ、将来の職業や進路に対する見通しを持ち始める重要な時期である。そのため、体験的な活動を通し、仕事や自己について考える機会を意図的に設けることが重要である。

しかし、中学校の特別支援学級においては、特別支援学校と比較して限られた時間や人的体制の中で実践を進める必要があるため、障害特性に応じた体験的なキャリア教育を継続的かつ計画的に提供することは容易ではない。

本稿では、こうした課題の解決に向けた参考事例として、南アルプス市における「就労支援ワーク」の取組を紹介する。この取組は、市の福祉部門と学校が連携し、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学生を対象に実施されている。年に一度の開催を通じて、生徒が将来の就労について考えるとともに、仕事や自己への理解を深める機会を提供することを目的としている。

これまでの活動では、市内の事業所（消防署、市のリサイクル事業部、コンビニエンスストア、カーディーラー等）における就労体験を中心に展開されてきた。生徒が実際の職場に身を置くことにより、仕事に対する具体的なイメージを深めたり、関心を高めたりするうえで、重要な学びの機会となっていた。一方で、体験を通し、先に述べた仕事理解や自己理解を深めたり、また、それを学校での学びと関連付けたりすることについては課題が残されていた。

このような背景の中、令和５年度から６年度にかけて、研究機関が参画し、仕事理解及び自己理解に関する学習上の課題を踏まえた就労支援講座の内容案を、市の福祉部門及び学校と連携して検討した。

本稿では、令和６年度に、障害のある中学生を対象に検討された、①仕事の意義やポイントを伝える動画教材、②ピッキング、数値チェック、組立作業による模擬的な仕事体験、③学習・体験前後に実施する「自己発見ワーク」等による、仕事理解と自己理解を促す学習の内容を紹介するとともに、地域資源を活用したキャリア発達支援の今後の課題について述べる。

２　検討された活動及び教材の内容

(1) 学習のねらい

動画教材や仕事の模擬体験を通して、①自分に合った仕事や、②そのための進路について考える機会をもち、さらに、仕事をするうえで大切なポイントを知ることを通じて、③自分の得意なことや苦手なことに関心を深め、仕事理解や自己理解を促すことをねらいとした。

(2) 動画教材

「仕事博士」というキャラクターが登場し、生徒が将来の就労について考えるための「秘伝の技」を授けるというストーリーで展開される。内容は、「仕事を知る」と「自分を知る」の２部構成である。

「仕事を知る」パートでは、「働く」とは社会の中で自分の力を発揮し、他者や社会に貢献することであると説明した。また、「はたらく＝人が動くことで、はた（周囲）も楽になる」といった言葉を用いて、働くことの本質を伝

えた。さらに、パン屋、農家、物流スタッフなど多様な職業を取り上げ、社会に存在するさまざまな仕事への理解を促した。そのうえで、「仕事をするうえでの５つのポイント（①話を集中してよく聞き、仕事内容を理解する／②集中して正確かつ丁寧に取り組む／③わからない時は質問、困った時は相談、終わったら報告をする／④気持ちの良い態度で人と関わる／⑤たすけあう）」を示した。

「自分を知る」パートでは、適職を見つけるためには、仕事理解と自己理解の重なりを意識することが重要であると説明した。そのうえで、自己理解に必要な視点として、「好きなこと・得意なことを見つけること」と「苦手なことを把握し、工夫や配慮で対応すること」の２点を示した。

全体としては、キャラクターや図・イラストなどの視覚的要素を活用し、学習への興味を高める工夫を施した。さらに、学習内容を「５つのポイント」と整理することで、生徒が要点を理解しやすくなるよう配慮した（図１）。

図１　動画教材（一例）

⑶ 仕事の模擬体験

模擬体験は、「チームでのピッキング体験」と「個人作業体験」の２つで構成した。

①チームでのピッキング体験

「協力して仕事をやり遂げよう！～チームでピッキング体験～」と題し、役割に分かれて文具や雑貨のピッキングから梱包、報告までの作業を協力して行う内容とした。各生徒は、リーダー、文具・雑貨のピッキング担当と検品係、梱包担当、梱包確認・報告係のいずれかの役割を担い、工程ごとに連携しながら作業を進めた。

②個人作業体験（障害者職業総合センターのワークサンプル幕張版を活用）

「集中して仕事をやり遂げよう～個人作業体験～」と題し、生徒が自分の特性や興味に応じて、以下の個別作業のどちらかを選択し、集中して取り組む内容とした。

・数値チェック：請求書と納品書を照合し、誤りを修正する作業。注意深さが求められる。
・プラグ・タップ組立：作業指示書をもとに部品を組み立てる作業。手順理解と手先の操作が求められる。

なお、①及び②の活動時には、「仕事をするうえでの５つのポイント」を意識して取り組むよう生徒に伝えるとともに、教員や市の職員が声かけを行った。あわせて、「ヘルプカード」を用意し、困ったときには自ら援助を求められるよう促した。

⑷ 自己発見ワーク・自己再発見ワーク

「自己発見ワーク」は模擬体験の前に実施し、「仕事をするうえでの５つのポイント」について、自分がどの程度実践できそうかを事前に考える形式とした。これにより、自分の得意なこと・苦手なことを意識化する機会とした。また、「自己再発見ワーク」は模擬体験の後に実施し、５つのポイントの実践状況や、自分に必要な配慮について考える機会とした。なお、本ワークは、苦手なことを自覚し、相談したり配慮を求めたりすることの重要性を、生徒に伝えることを意図して構成した。

⑸ 学校での学びとの関連付けの工夫

就労支援ワークへの参加は、学校では「自立活動」の時間として位置付けられている。このため、教員と共有する活動展開案においては、キャリア教育の視点のほか、「自立活動」における自己理解に関する内容との関連を示した。具体的には、「健康の保持（障害の特性の理解と生活環境の調整）」及び「人間関係の形成（自己の理解と行動の調整）」との関連を示し、模擬体験や振り返りを通じて、自分の特性が作業遂行に及ぼす影響や、集団内での行動調整を体験的に学ぶ機会となることを示した。

３　成果と今後の課題

生徒は、動画教材と模擬体験を組み合わせた学習を通して、抽象的な概念としての「働くこと」を自分ごととして捉え直す機会を得た。また、教員にとっても、本取組は学校教育との接続を意識する契機となった。一方で、その客観的評価や効果的な方策の検討においては、なお課題が残されている。

今後は、こうした課題の改善を図りつつ、地域資源を活用し、持続可能な形で本取組を継続していくことが求められる。その一環として、令和７年度の実践では、特別な機具を用いずに実施できる模擬体験へと内容を調整するとともに、講座終了後に学校で活用できる振り返り教材を整備し、学校での学びへと還元するための方策について検討を進めているところである。